

登山道のグレーディングを活用したらこの事故は避けられたかも

OWCC 中川和道 20240516

岩登りルートには5.10などというグレーディング(困難度、等級)がある[1]。山歩きルートつまりは登山道には、グレーディングがないのだろうか？実は、登山道での遭難や事故を防ぐ一助として、体力度と難易度に応じたグレードが、登山道にも設定されている。最初に公表したのは2014年の長野県だ[2]。もちろん、事故を防ぐには、体力度と難易度だけでは不十分で、さらに、天候・残雪・体調なども必要な付加要素ではある。が、根幹的なデータとして体力度と難易度に着目し、長野県がまずはここから始めた点が評価に値する。「山のグレーディング」は、今や、10県1山域に広がった[2]。10県1山域で、尺度は共通である。

この「山のグレーディング」を活用したら、避けられたかもしれない事故に中川は出会った。今回は、これを検討してみよう。近畿ブロックある山岳会での仲間の事故だ。

昔、同じ高校山岳部にいた2名(AさんとBさん)が、50年ぶりに剣岳源次郎尾根を登ろうと記念クライミングを企画した。お盆休みを避け、8月5日から入山である。見事な晴天ではあったが、反面、真夏の日差しは暑い。源次郎尾根に取付いてすぐ、AさんはBさんのペースがちっとも上がらないことに気づいた。聞けばBさんはクライミングからはとくに足を洗い、登山道歩き以外はやっていないという。源次郎尾根特有のバリエーション登攀(手も使い全身でかいっぱい登る)を続けること4時間、やっとI峰のピーク目前に達したとき、Bさんの疲労はすでにひどかったという。水を1Lしか飲まなかったこともあるのだろう、そのうちに熱中症の症状が出始めた。藪をかき分けて体当たりで進む。木の枝が跳ねて目に当たり、ついに登高を断念。先の行程はまだ長い。2人は救助を要請し、ヘリで搬出された。

この事故の教訓を、登山道のグレーディングという観点から探ってみよう。

そもそも50年ぶりにパーティーを成立させ、登山目標を達成するには、現時点での、お互いの実力を把握し、それに見合った目標を設定することが必要だ。それには、

- (1)最近、共通に登った山(例えば、1年前に登った槍ヶ岳)での実績(所要時間やバテ具合など)を交流する、あるいは、
- (2)上記のグレーディングを地元の山に適用しておき、体力度いくつ・難易度いくつのコースを何時間で登ったかを交流する。
- (3)そのうえで、目的とするルートに、パーティーの実力が適合するかを判断する。

これができるためには、

- (A)目的のルートの、グレーディングが分かっていること(この場合は源次郎尾根)、および、
- (B)地元の山に、共通グレーディングのルートがあること、が必要だ。

実は、六甲山には、昔から、グレーディングがついているルートがある[3]。労山兵庫県連が筋カトレの基準ルートとして使っているあのルート、「六甲山タイムトライアルルート」、阪急芦屋川駅から六甲山頂までのルートである[3]。

上記の事故は、AさんとBさんとが、互いに地元の山でグレーディング登山を実践し、その結果を交流していれば、防げていたかもしれない。

全国の仲間たちで、互いに、地元の山にグレーディングをつけようではないか。そういう事故防止登山運動を、全国で起こしたいものだ。

[1]「グレード比較表 | 山と溪谷社のクライミング・ボルダリング総合サイト CLIMBING-net クライミングネット」でWeb検索。 [2]Wikipedia「山のグレーディング」。 [3]山本正嘉「登山の運動生理学とトレーニング学」、2016年、東京新聞、p. 58。